

トランスナショナルな家族の再編と教育意識 フィリピン系ニューカマーを事例に

額賀美紗子 *NUKAGA Misako*

——はじめに

1 —— 先行研究の検討

2 —— 調査の対象と概要

3 —— トランスナショナルな家族の形成と再編

4 —— トランスナショナルな社会空間で強まる家族の教育期待

5 —— 家族の教育期待に対する子どもたちの反応

—— 結語

【要旨】本稿は、フィリピン系ニューカマーを事例として、国境を越えるトランスナショナルな家族が形成される過程と、そうした家族の在り方が子どもの心理や学習に与える影響について考察する。着目するのは、フィリピン系の子どもたちの生活世界が、頻繁な母国訪問と送金、インターネットの利用、そして家族中心主義の文化によって、トランスナショナルな社会空間に拡張している点である。日比の間で家族関係が維持される中、親と母国親族は一体となって子どもに高い教育期待をかけ、勤勉や従順といった規範を子どもたちに身につけさせている。子どもたちの間には家族の教育期待に添って学習に向かう意欲がみられる一方で、長年離れて暮らしていた親との関係に悩み、家族に対する疎外感を深めている様子が見え隠れした。フィリピン系の子どもたちが抱える心理的な葛藤や学習上の困難が、トランスナショナルな家族の再編に起因している側面に注目する必要があるだろう。

——はじめに

1980年代以降、中国・韓国・ブラジル・フィリピンを中心に、海外から日本に移住する「ニューカマー」と称される外国人の数が飛躍的に増加している。その変化に伴って、日本の公立学校に在籍するニューカマー生徒の数も急増し、かれらが日本語力や日本の学校的知識の不足をはじめとする様々な学習困難を抱えていることが注目されるようになってきた。ここ10年の間には、ニューカマー生徒の学業不振や不就学、高校進学率の低さなどに焦点化した研究が蓄積されつつある。学業達成の要因としてこれまで検討されてきたのは、ニューカマー生徒の渡日年齢（鍛冶 2007）、家族の教育戦略（宮島 2002; 志水・清水 2001）、日本の同質的な学校文化（志水 2002; 太田 2000; 恒吉 1996）、地域の支援システム（坪谷 2005）、日本の教育制度（佐久間 2006）など多岐にわたり、個人の属性・文化・社会システムの関連性に配慮した多角的視点から学業達成を分析することの重要性が示唆されている。

本稿ではニューカマー生徒の学習困難を生み出していると考えられる一つの要因として、家族のあり方を検討したい。ニューカマーの家族は経済的な困難に加え、日本語力の不足や、学校教育に関する母国文化と日本文化の齟齬によって、親が子どもに対して十分な学習支援を行えないことが数々の研究で報告されている（たとえば宮島 2002）。これらの研究は日本国内における家族のあり方を考察したものである。だが、ニューカマー生徒の中には国境に限定されない家族を築いている者たちがおり、そのことについてはまだあまり注目されていない。こうした新しいタイプの家族については、トランスナショナルな視角から考察する必要がある。

トランスナショナルな視角とは、「移民の量的な拡大と加速度的な移動を背景としながら、出身国と受け入れ国との間の頻繁な往復や出身地との間の人的・情報的・経済的関係の持続といった社会組織上の質的な変化」（小井土 2005：381）に着目する研究視点である。その視角からは、国境を越える紐帯が、ホスト社会における移民の主体的戦略、資源の動員や適応に関していかなる影響を与えているかについて考察することが課題となる。1980年代以降の北米では、移民が草の根的に越境的実践に従事する過程に焦点を当てた「下からの」トランスナショナリズム研究がさかんになり、移民のホスト社会適応に関する新しい道筋が呈示された（Portes et al. 1999）。日本では日系ブラジル人の研究においてトランスナショナルな視角の適用が見られ始めたものの¹⁾（イシ 2007；梶田・丹野・樋口 2005）、ニューカマー家族をトランスナショナルな視角から考察した研究は未だ稀少である。ニューカマー家族の生きる生活世界がホスト社会に留まらず、「トランスナショナルな社会空間」（Levitt and Schiller 2004）に拡張している可能性に注目する必要があるだろう。

本稿では「トランスナショナルな家族」の事例としてフィリピン系家族をとりあげる。ニューカマーに関する研究が積み上げられてきた中で、フィリピン系の子どもに関する家族と教育については未だ研究蓄積が少ない現状がある（角替・家上・清水 2011）。本稿は、フィリピン系の子どもたちの家族が国境を越えて編成される過程を明らかにし、その中で子どもに対する家族の教育意識がどのように形成され、子どもたち自身が教育期待をどのように受けとめているかについて考えてみたい。その分析を通じて、フィリピン系の子どもたちが抱える心理的な葛藤や学習上の困難が、トランスナショナルな家族の再編に起因している側面があることが明らかになるだろう。

次節ではまず、トランスナショナルな家族の形成に関する近年の研究を整理し、その事例として取り上げることで国内のフィリピン系家族について先行研究を概観する。

1 —— 先行研究の検討

1.1 トランスナショナルな家族の形成

先進国における就労や結婚、教育機会を目的とした国際移動の増加に伴い、家族成員が異なる国に居住する現象は近年一層顕著にみられる。Foner（2009）は母国とホスト社会に

分かれて住む近親者の間に経済的・社会的・情緒的紐帯が維持されるケースは珍しくないことを指摘し、国境を越えてもお互い義務や愛情によって結ばれている家族を「トランスナショナルな家族」と定義している。

トランスナショナルな家族の形態は多様である²⁾。近年注目されているのは、貧しい途上国の女性が高賃金労働を求めて先進国に単身で移住するケースの増大である。そうした女性たちの中には子どもを持つ母親も多く含まれる。Dreby (2009) は、かつては父親が妻子を母国に残して先進国に働きに出るというのが移民の一般的なパターンであったが、近年は父親ではなく途上国の女性たちの間に同様の動きがみられるようになってきたという。女性たちは長期にわたって母国の親族のもとに子どもを預け、移住先の国から子どもたちとの絆をなんとか維持しようと苦労していることが報告されている。こうした母子の別離による「国境を越えた母親業」(Parreñas 2005) は、アメリカにおいては、フィリピンやメキシコをはじめとする中南米出身の女性たちの間にみられる (Dreby 2009, Menjívar and Abrego 2009, Parreñas 2005)。日本の場合、本稿で取り上げるフィリピン系の女性たちがこのケースに当てはまる。

母子の別離によって形成されるトランスナショナルな家族は様々な問題を抱えるという。先行研究では、親子が異なる国に居住する場合、直接的な接触の少なさと異なるライフスタイルによって、親子の情緒的結びつきは脆くなることが明らかにされている (Zhou 1998, Menjívar and Abrego 2009)。また、呼び寄せや帰国によって親子が一つの国で再会する際も、長期間のトランスナショナルな別離によって生じた親子の溝は、両者の関係形成を困難にする。こうした親子関係の葛藤が学業達成に負の影響を及ぼすことも指摘されている。たとえば、Smith (2006) は、家族の別離や再会、それに伴う頻繁な国際移動というプロセスは、子どもの帰属感の喪失、家族関係の葛藤や教育過程の断絶に繋がり、学業達成を困難にすると指摘する。呼び寄せられた子どもたちは、親子関係の再形成と同時並行で、ホスト社会の文化や学校に適應することを求められるが、それは容易なことではない。子どもたちの学校適應を理解するためには、トランスナショナルな家族の形成と再編の過程についての考察を深める必要のある事例が増えており、本稿ではその一つの事例としてフィリピン系ニューカマー家族を考察する。

1.2 フィリピン系ニューカマー家族のトランスナショナルな在り方

2010年末の外国人登録統計によると、日本に3ヶ月以上滞在するフィリピン国籍者は約21万人で、中国、韓国・朝鮮、ブラジルに次いで国内で4番目に大きいエスニック集団となっている。在留資格別では、「永住」が約9万2千人(全体の44%)、「日本人の配偶者等」が約4万1千人(20%)、「定住者」が約3万8千人(18%)、「興行」が約6千人(3%)の順で多く、全体の78%が女性である。主に女性の「エンターテイナー」に適用される興行ビザの発給は、基準厳格化によって2005年以降は激減しているが、1980年代からは増加の一途にあった³⁾。現在は過去に「エンターテイナー」であった女性が、日本人男性と結婚し、

「永住」「日本人の配偶者等」「定住」等の資格で日本に居住するケースが増加している⁴⁾。彼女たちの中には、日本人男性と結婚する前に生んだフィリピン国籍の子どもを「連れ子」として母国から呼び寄せる者も多いと推測される。一方、日比国際結婚とは異なるルートで日本に居住しているフィリピン系ニューカマーもいる。太平洋戦争後もフィリピンに残留した日本人の子孫が、1990年の入管法改正によって取得可能になった「定住者」ビザによって日本に移住するケースである。

本稿が言及する「フィリピン系家族」は、定住資格で入国し、父母ともにフィリピン系の場合と、国際結婚によって母だけがフィリピン系の場合との両方を含む。調査対象の家族に共通してみられるのは、子どもたちを母国の親族に預け、親だけが先に日本に渡り、親子が日本とフィリピンの間で離れて住むという傾向である。すなわち、トランスナショナルな家族が形成される経緯がみられるのである。

フィリピン系ニューカマーに関する先行研究のほとんどは成人女性に焦点化したものであるが、その中には彼女たちのトランスナショナルな活動に注目した研究がいくつか見られる。小ヶ谷（2005）は、在日フィリピン系女性たちが個人や組織単位で母国への寄付活動や教育活動に従事し、そのことがフィリピン社会に対して社会的立場を誇示し、日本社会において自尊心を高める手段になっていると考察する。永田（2007）は、フィリピン系女性たちが、国家の監視と管理下にありながらも、情報通信機器の利用や送金を通じて母国の人々との繋がりを維持し、循環的で連続性のある人の流れをインフォーマルな形で日比間に形成しながら、「国家権力の隙間を突く」適応戦略をしたたかに実践しているという⁵⁾。これらの研究は、フィリピン系女性たちのトランスナショナル実践とホスト社会適応の関係性について論じている点で示唆的である。しかし、子どもを含むトランスナショナルな家族の形成については言及されていない。

フィリピン系ニューカマーの子どもを扱った数少ない研究の中で、トランスナショナルな視角を用いた徳永（2008）は、フィリピン系女子中学生が、かつて母国に自分を置いて日本で就労していた母親や、現在母国や欧米諸国に住む親族女性をロールモデルとして、将来展望を形成することを明らかにした。フィリピン系生徒の意識が、トランスナショナルな社会空間の中で形成されているという徳永の指摘は重要である。この背景には、国境を越えて維持されるトランスナショナルな家族の存在がある。ではこうした家族はどのようにして形成、再編されているのだろうか。どのような教育意識がトランスナショナルな社会空間の中で醸成され、子ども自身はそれをどのように解釈しているのだろうか。どのような親子関係の葛藤がトランスナショナルな家族にはみられるのだろうか。本稿ではこれらの問題を検討する。

2 ― 調査の対象と概要

本稿が事例として取り上げるのは、神奈川県厚木市に住む15歳から17歳までのフィリピ

ン系ニューカマー 4 名である。2010年末の統計によると、厚木市の外国人登録者数は6020人であり、フィリピン国籍者は538人となっている。国籍別では中国、ペルー、ブラジル・韓国・朝鮮に次ぐ集団規模である。筆者は、他の協力者とともに同地区でニューカマーの子どもを対象とした学習支援室を開設し、2009年11月の教室開設以降、10名のフィリピン系ニューカマー生徒と接触があった⁶⁾。この子どもたちに対して、半構造的インタビューと教室における参与観察を実施してきたが、本稿ではトランスナショナルな家族の再編事例として4名を取り上げる。4名の生徒のプロフィールは下記の表の通りである。このうち3名(サラ、アントニオ、マユミ)については、親への半構造的インタビューも2010年から2011年にかけて実施した⁷⁾。

	年齢	渡日時年齢	親との別離期間	現在同居する両親	学校適応の状況
サラ	16歳	11歳 (小学5年)	母親と10年	フィリピン人の実母・日本人の継父	外国人特別募集枠が利用できなかったため、通常の受験で定時制高校に進学。1年次に在籍中。
エド	17歳	13歳 (中学1年)	母親と13年	フィリピン人の実母(日本人の継父と母は離婚)	外国人特別募集枠で県立高校に進学。2年次に在籍中だが不登校ぎみ。
アントニオ	15歳	12歳 (小学6年)	母親と8年 父親と9年	父母ともにフィリピン人(父が日系人)	公立中学3年に在籍。中学2年次から不登校ぎみ。
マユミ	17歳	13歳 (中学1年)	母親と5年 父親と13年	父母ともにフィリピン人(父が日系人)	外国人特別募集枠で県立高校に進学後、1年次末に退学。

サラとエドは、かつてエンターテイナーとして入国したフィリピン人の実母と日本人の継父をもつ、国際結婚家庭の子どもである。実の父親はフィリピン人だが交流は一切ないという。アントニオとマユミは、両親ともにフィリピン人で日系人の定住資格によって入国した子どもである。

この4名は在留資格や家族のエスニック構成が異なるとはいえ、階層的には親が全員共働きで、経済的に余裕がある家庭ではないという点が共通していた。また、全員が過去5年以内に日本に呼び寄せられた子どもであり、それ以前は日本で就労する親と離れ、母国の親族のもとに預けられていた。親との別離の期間は5～13年間と長期にわたり、その背景には日本における生活が経済的に安定するまで子どもを呼び寄せられなかったという親の事情がある。この4名の事例を通してトランスナショナル家族が(再)形成される過程と、そこにおける家族の教育意識のあり方および家族の教育期待に対する子どもたちの受け止め方を考察してみたい。

3—— トランスナショナルな家族の形成と再編

親に呼び寄せられたフィリピンの子どもたちに「家族」のことを尋ねると、日本で一緒に住むことになった親兄弟だけではなく、フィリピンに住む祖父母や親戚が必ず話題にのぼる。物心ついた頃から親が海外就労で家に不在だったかれらにとって、「家族」は一緒に共同生活を営む人々に限定されない。子どもたちは、トランスナショナルな視点に立ち、国境を越えて経済的・社会的・情緒的紐帯を維持する人々を包括的に「家族」として捉えていた。こうした「トランスナショナルな家族」はどのようにして維持することが可能になるのだろうか。

注目したい一点目は、送金や訪問、またインターネットツールを介した家族成員の絶え間ないトランスナショナルな実践である。二点目は、トランスナショナルな実践の原動力となり、家族成員をつなぎとめる役割を果たす、家族中心主義の文化の存在である。以下でこの2点について検討してみよう。

3.1 家族のトランスナショナルな実践

まず、フィリピン系家族の間に顕著にみいだせるトランスナショナルな実践が母国送金である。先行研究では、子どもを親族に預けて海外就労する母親たちが、親族への送金によって子どもの安全と教育を保障し、子どもとの愛情関係を取り結ぼうと試みることが報告されている (Parreñas 2005)。調査対象となった4家族の母親たちも来日当初から母国送金を行い、それによって遠隔地から「愛とお金のあるトランスナショナル家族」 (Parreñas 2005) を形成しようと尽力していた。その実践のおかげで、子どもたちは母国で自分を育ててくれた祖母や叔母を「お母さん」と慕う一方で、遠く離れた地に住む親との結びつきを失うことはなかった。親子が一緒に時間を過ごし、会話をする機会は限定されていたものの、子どもたちは日本で働く親が「家族のために」お金を送ってくれている事実を知っており、家族の生活を維持していくために必要不可欠な存在であることを理解していた。

子どもを母国から呼び寄せた後も、親が母国送金を継続することによって、トランスナショナルな家族は形を変えながら維持されている。母親たちは母国の父母や兄弟に仕送りを継続しており、そのお金は親族の教育費や生活費に充てられていた。サラとエドの母親は、日本で稼いだお金でフィリピンに家を購入しており、サラの母親はそこに親族を住ませ、エドの母親は賃貸にして毎月の家賃収入を祖母が受け取れるようにしていた。母親たちは皆送金を当たり前の義務と見ているが⁸⁾、経済的に余裕がある生活を日本で過ごしているわけではない。日本人の夫と離婚したエドの母親は、昼夜働くことで家計をやりくりしつつ、母国への送金を続けていた。エドは「そうしないとフィリピンの家の電気と水道が止まっちゃうから」と語り、母親を助けるために、自らもバイト代月額3万円から1万円を母国の親族に送っていた。サラとマユミも、将来は親のように送金をしてフィリピ

ンの家族を助けたい、とはっきりした意思を表明していた。子どもたちが成長して賃金を得るに従い、母国送金の慣習は親から子へと引き継がれ、トランスナショナルな家族は再編を伴いながら世代間で維持されていくと考えられる (小ヶ谷 2005、徳永 2008)。

トランスナショナルな家族を維持する第二の方法は、母国訪問である。子どもを呼び寄せる前、親たちはビザ更新時などで一時帰国するたびに子どもたちと顔を合わせていた。たとえば、サラの母親は、サラを11歳で日本に呼び寄せられるまで、年に2、3回は子どもたちと対面していたと話す。サラは、母親について詳しいことはよく分からないまま成長したものの、物心ついた頃、姉に「あの人が日本にいるお母さんだよ」と教えてもらってからは、「お母さんがほんとに日本にいるんだ」と思うようになったと言う。短期間で断続的ではあるものの直接的な交流の機会をもつことによって、親子は互いの存在と結びつきを確かめ合うことができたと考えられる。

子どもを日本に呼び寄せた後も、親たちは長い休暇の際には子どもと一緒に一時帰国すると話し、中には仕事でフィリピンと日本の間を頻繁に行き来するという者もいた。Espiritu (2003) の調査によればフィリピン文化の特徴のひとつとしてアメリカにいるフィリピン系移民が挙げるのは、「家族の集まりの多さ」である。本調査で対象となった親子も、母国に一時帰国した際には祖父母や叔父叔母の家に宿泊し、従兄弟や兄弟たちと買い物やお墓参り、イベントに出かけて、常に一緒に時間を過ごすという。そして、日本の食べ物や洋服など、大量のお土産を親族に手渡すことが、一時帰国の際の恒例行事になっていた。母国の友人との結びつきは年を追うごとに希薄になっていたが、親族ネットワークだけは帰国のたびに実体を伴うものとして再確認され、国境を跨いで存在し続けていた。無論、日本～フィリピン間の往復運賃は高いため、そう頻繁に一時帰国できるわけではない。日本人の夫の中には、妻と子どもの里帰りを好ましく思わない人もいた。このため、物理的な移動を伴わず、母国の親族との関係をつなぎとめる第三の方法が重要になってくる。

それは、情報技術によるトランスナショナルな紐帯の強化である。国際電話に留まらず、よりコストを抑えることのできるインターネットを通じて、親も子も頻繁に本国の親戚とやりとりをしている様子がうかがえた。ここで留意したいのは、送金と母国訪問というトランスナショナル実践の主導権は親にあり、パソコンを購入して通信費を支払うのは親であっても、インターネットの利用に関しては子どもの方が積極的であるという点である。子どもたちの間では、特にFacebookというソーシャル・ネットワーキング・サービスが人気で、かれらの「Friends」の欄にはフィリピンだけではなく、アメリカやイギリスにいる親族が列記されている。4人とも「Friends」に登録されている人数は400人から500人であり、尋ねるとその半数は「フィリピンの家族」であるという。

日記を書きこんだり閲覧したり、チャットすることが子どもたちの日課となっていて、かれらは Facebook を遠く離れた家族メンバーの様子を把握するツールとして、また自分の気持ちのはけ口として利用していた。「空間と時間を圧縮する装置」(Portes他 1999) として機能するインターネットを活用することで、子どもたちは海の彼方にいる親族と物理的な

距離はあっても、心理的には決して遠いところにはいない「家族」としての関係を築いていたといえる。トランスナショナルな家族の基盤が、先進国で稼ぎ手となった親たちの送金や母国訪問によって形成されると同時に、子どもたちもまた、インターネットというツールを通じて国境を越えた家族の維持に貢献していることに注目する必要がある。

3.2 家族中心主義の浸透：「自分のことよりも家族を優先」

ではそもそも、フィリピン系ニューカマーをトランスナショナルな実践へと駆り立て、越境的な家族を維持させる原動力は何であろうか。これについては、フィリピン系家族が共有する価値観や規範といった文化に注目したい。在米フィリピン系移民の若者を調査した研究 (Espiritu 2003; Wolf 2002) は、かれらにとって「フィリピン人である」ということが、家族に貢献することや、家族の結束を重視することを意味すると示唆している。本調査で対象となったフィリピン系ニューカマーの言動にも、「家族中心主義」(Espiritu 2003, Wolf 2002) といえる文化が反映されていた。子どもたちは家族を大切にし、家族の言いつけを守らなくてはならないという認識を非常に強く持っていた。サラとアントニオによる次の会話からは、自分の欲求よりも家族の利益を優先させ、家族のために貢献することを規範とする姿勢をうかがうことができる。

サラ：ママが言った。自分のことをする前にファミリーを助けなくちゃいけないって。

アントニオ：それはそうだね。

サラ：みんなそうなの、フィリピン人は。ファミリーを助けることができれば、自分を助けていい。それが一番大変。

アントニオ：もしファミリーを助けなかったら、みんな悪口言ってきます。

サラ：humble (謙虚) じゃないって言ってきます。

筆者：ファミリー大事なんだね。

アントニオ：そうです。

サラ：うちいっぱいファミリーいるんだよね。どうしよう。ママ大変だもん。お金送らなくちゃいけないくて。

この会話からは、子どもたちが言及する「ファミリー」が、日本で一緒に住む親兄弟だけではなく、フィリピンにいる親族を含めたトランスナショナルな拡張型家族であること、そしてかれらが「自分のことよりも家族を優先させなさい」という言説空間に生活していることが考察できる。子どもたちはそのような家族中心主義の文化的視点から、日本とフィリピンに分かれて住もうとも、家族とみなす以上、互いに対する義務が発生すると考えている。たとえば、かれらは本国にいる親族への送金、一時帰国の際の大量のお土産、そして電話やインターネットを通じた頻繁な交流を、フィリピン家族の中で当然果たすべき

義務として捉えていた。このことがトランスナショナル実践を継続させ、越境的な家族を維持する原動力を生み出していると考えられる。

もしその義務を怠った場合どうなるのかと子どもたちに尋ねたところ、家族に悪口を言われ、最悪の場合は「憎まれて口をきいてくれなくなる」という答えを受け取った。家族中心主義の文化の中で育った子どもたちは、そうした家族からの疎外を耐えがたいものとして感じていた。それゆえに、かれらはトランスナショナルな社会空間の中で、母国とホスト社会に跨る家族成員の期待や要求に沿い、幼いときに自分たちを育ててくれた母国親族に対して「恩返し」(定松 2002) をすることを自明視するようになると考えられる。

では、日本社会における学業達成に関して、親や母国親族を含むトランスナショナル家族が子どもにかかる期待とは具体的にどのようなものなのか、次に見ていこう。

4—— トランスナショナルな社会空間で強まる家族の教育期待

子どもたちの親の学歴はハイスクール卒からカレッジ卒までいて多様であるが、共通していたのは子どもの将来にとっての学歴の効用を非常に重視していた点である⁹⁾。親たちは、高校進学は絶対的な目標、できることならば日本の大学進学まで、それが無理ならばフィリピンの大学に進んでほしいと希望していた。

子どもたちには、大学まで行って仕事見つけてほしい。(…) 私は大学まで行けなかった。だから(フィリピンの)兄弟にも言ってる。あなたたち大学行かないとだめだよって。だって外国に行ってもいい仕事ない。大学行かないと。(サラの母)

子どもたちは勉強をしたがってるので、ここで子どもたちに勉強を頑張ってもらって大学に行ってほしい。(フィリピンより) 日本は教育ずっといいし、給料もずっといい。勉強していい仕事みつけてほしい。(アントニオの父)

また、高校を中退してしまったマユミの母は次のように語った。

高校に行ってくれたのとっても嬉しかった。やめてしまってとても残念。高校行って大学行ってほしかった。(筆者に向かって) もう一度高校に入れませんか？

こうしたフィリピンの親の発言は、フィリピンと日本、両方の経済状況を見据えたものである。フィリピンは1970年代から深刻な経済不況に悩まされており、高い国内失業率を緩和するため、政府が積極的に出稼ぎ労働者を海外に送り出している(定松 2002)。調査対象となったフィリピンの親たちは、フィリピンに仕事がないこと、あっても非常に少ない額の収入しか見込めないことを口ぐちに語った。その一方で、日本の経済状況に関する見

方は楽観的である。親たちはフィリピンと比較して、日本がずっと裕福な国であり、学歴があれば高い収入を見込めることを強調する。

注目したいのは、こうした教育的価値の重要性が親からだけではなく、フィリピンにいる親族からも子どもに向けて発信されている点である。日常のメールや、一時帰国の際など、「日本の学校で頑張って勉強しなさい、せっかくのチャンスなんだから」と、繰り返し親族に言われると子どもたちは話す。たとえば、エドはつい昨日、母国の祖父母と兄から勉強しなさいという注意の電話を受けたと話す。

エド：昨日おばあちゃんに怒られた。お母さんと喧嘩したんですよ、勉強してないって。で、おばあちゃんからすぐ電話来たんですよ。ちゃんと勉強しなさいって言われて。お母さんが話したみたいです。みんな、今フィリピンの人俺に怒ってるって。家に帰らないで勉強しないでお酒飲んでるって。最初お兄ちゃんから電話来て、どうしたのって。お兄ちゃんと話して、そのあとおばあちゃんと話して、その次おじいちゃんと話して。みんなにどうしたのって言われて。

筆者：おばあちゃんたちにどんなふうに言われるの？

エド：せっかく日本にいるんだから頑張って勉強していい仕事見つけなさいって。フィリピンに帰ってもいいことないから、ここで頑張るなさいって。

このように、トランスナショナルな家族ネットワークの中で、教育的価値が規範化しており、その関係性に埋め込まれているフィリピンの子どもたちは、日本の学校で勉強を頑張り、将来いい仕事に就くことで家族に「恩返し」することを、一緒に住む親だけではなく、母国親族からも強く求められている。上の事例が示すように、子どもが日本で勉強をしなかったり、逸脱行動に走ろうとするとき、トランスナショナルな家族紐帯を維持するフィリピン人の親は、母国の親族に電話やメールで状況を報告し、子どもに注意を与えるように頼むことが可能になっている。そして、こうした母国親族による教育期待は、子どもたちが日本の学校でくじけそうになる中、かれらの学習意欲を失わせない安全弁として機能していた側面もみられる。トランスナショナルな家族紐帯は、高い教育期待を規範化し、子どもの学習に対する動機づけに影響を与えていたと考えられる。

5——家族の教育期待に対する子どもたちの反応：従順さと静かな抵抗

フィリピンの子どもたちの生活は、教育的価値を重視するトランスナショナルな言説空間に埋め込まれており、かれらは家族からの教育期待を痛切に感じていた。そうした期待に対して、子どもたちはどのような反応を示しているのだろうか。

限られた事例の中からの考察ではあるが、調査対象となった4人の子どもたちに共通していたのは家族に対する従順な態度である。前述の通り、トランスナショナルな社会空間

の中で子どもたちは家族のためにつくし、生活全般にわたって家族の期待や要求に沿った言動をするべき、という規範を植えつけられていたが、それを受けて子どもたちの間には、家族にとっての「いい子」であろうと努力する様子が共通してみられた。たとえば、エドは日本人の継父への嫌悪を語り、学校では教師から素行を問題視されていたが、フィリピン人の実母に対してはそれとはまったく異なる従順な態度を示している。母親に怒られたときに言い返したりするのか尋ねると、「言いたくても言えない、お母さん泣いちゃうから。自分の中に溜めこんじゃう」と話した。最近つい反抗的な言葉を口走り、母親を泣かせてしまったばかりなので、「いい子になろうと思って。洗濯物とかお母さんに言われる前にたたんだりしてる」と反省の意を表明している。

また勉強に関しても親の期待に沿いたいという発言が目立った。かれらは、フィリピンに戻っても仕事はないので、日本で勉強を頑張っていい仕事に就きたいという考えを強く持っていた。実際、対象となった子どもたちの中で勉強が好きと積極的に言う者はおらず、どちらかといえば嫌いという者ばかりであった。にも関わらず、勉強はしなくてははいけない、勉強を頑張りたい、と口にする。なぜかと尋ねると、サラは「勉強しているのは自分のためだけじゃないから。自分のためと家族のために勉強してる」と答えた。サラは一生懸命勉強して少なくとも高校には進学し、日本で収入の高い仕事に就いて、将来は親族のためにフィリピンに家を購入し、母親のように送金をしたいと考えている。

このように、子どもたちは親を敬い、親の期待や言いつけに対して従順な態度を示していたが、その一方で親との関係に悩んでいた。長年離れていた親子が受け入れ社会で共同生活を始める際、親子の双方に対する身勝手な期待が親子関係に支障をもたらすことが明らかにされているが (Menjívar and Abrego 2009)、本調査でも親に対する期待と現実の齟齬に悩む子どもたちの姿がみられた。日本に渡った親が送金によって子どもとの関係性をつなぎとめようと努力することは先に述べたが、物心ついた頃から親がそばにいなかった子どもたちにとっては、母国で育ててくれた祖母や叔母が「お母さん」であった。日本で働く親が、家族の中で必要不可欠な存在だと認識してはいたものの、親子が一緒に時間を過ごし、会話をする時間は限定されていたため、子どもたちは日本に来るまで親のことをよく知らなかった。

この親子間の心理的距離は、日本で共同生活を始めるにあたって縮むどころか、逆に開いていく。長い間離れていた親と一緒に住むことに対し、子どもたちは喜びととまどいの両方があり、すぐには親と打ち解けられなかったと語る。かれらは、親のおかげでフィリピンよりも安全で物質的に豊かな日本に住めることに感謝していたが、その一方で、親から高い教育期待をかけられることに強い不満をもっていた。たとえば、サラは次のように語る。

最初は日本に来てお母さんと会えるのが嬉しかったけど、だんだんそうじゃなくなってきた。あんなにお母さんの期待が高いとは思わなかったからガッカリした。

8年間両親と離れていたアントニオはノートに次のような英語の詩を綴っていた。

両親は子どもに期待しすぎる

子どもは両親の言うことを何でも聞く人形ではないのだから

こうした子どもたちのつぶやきからは、両親に対する抑圧された不満を垣間見ることができる。アントニオは、親に文句を言われたくないので家では自室にひきこもってしまうことが多く、お金さえあれば今すぐにでも親から離れて一人暮らしをしたいと語る。彼は不登校の状態にあるが、そのことを家ではひた隠しにし、親は担任が家を訪ねてくるまでその事実を半年以上知らなかった。

子どもたちが感じる親との心理的距離や、それに伴うコミュニケーションの希薄さは、子どもが進学や学習、学校のことなどで親を頼ることを難しくさせている。たとえば、日系のマユミの父は、マユミよりも7年先に日本に来ていたため日本語の日常会話には困ることがない。しかし、マユミは父に学校の勉強や宿題について助けを求めたことはなく、筆者たちの学習支援教室で教えてもらう以外は、すべて自分でなんとか終わらせていると話す。なぜ父親に頼らないのかを尋ねると、マユミは「お父さんよくわからない。怖いです。聞くの恥ずかしい。」と答えた。彼女は恋人との交際を親に反対されており、常に行動を見張られていることに対して不満を漏らすが、親が「怖い」ので言いたいことがあっても言わないと話す。学校で困ったことがあっても、親に相談することはない。彼女は高校に進学して以降、学習内容が難しくなるに従って勉強する意欲を失っていき、高校1年の終わりに退学してしまった。

親に対する畏怖の念は、日本人の継父をもつ子どもたちの間でより顕著にみられた。それは、呼び寄せられた子どもたちが、突然一緒に生活することになった日本人の「父親」と信頼関係を形成することに、血のつながりのある母親の場合以上に大きな困難を覚えていたためである。日本人の父親は言語や日本の学校知識の卓越性という点で、子どもの学習を手助けする重要な資源となりうる。日本人の継父の間には、三者面談への参加や、通信簿や提出物のチェック、宿題の手伝いなどを時々行い、子どもの教育に関与しようとする姿勢がみられた。しかし、子どもの方にはそうした父親の手助けを嫌う様子がうかがえた。サラは、父親が「日本人だから日本語話せて頭よすぎる。勉強しろって自分の自信をなくすような文句をいつも言うてくる」ので、父親には頼りたくないと言った。彼女は、日本人の継父が無意識的に提示する権力の前で委縮し、マユミと同様、親の期待にこたえられない自分を恥ずかしいと感じている。その権力に真っ向から抗う力を持たない彼女は、父親と口をきかないという手段によって、自尊心を維持していた。

しかし、親との交流を避けるという子どもたちの「静かな抵抗」は、日本人や日系人の継父が潜在的にもっている学習資源を有効活用できない状況を作り出していた。母親が仲

介役となって父子間の関係を取りもつということも、母子の間に強い信頼関係が築かれていないために成功することは少ない。このように、親と長期間離れていた子どもたちは親に対する疎外感を深めていく傾向にあり、再形成されるトランスナショナルな家族の構造は、学習において子どもが親を頼り、親が子どもを助けるといった関係を構築することを難しくしている。

—— 結語

Coleman (1988) は、親子間にみられる強い社会的紐帯が、情報や人材の供給源となったりと、逸脱行為を防ぐ監視システムとして機能する結果、子どもの学力向上に資すると指摘し、そうした信頼に基づく関係性を社会関係資本と呼んだ。彼によれば、家族内の社会関係資本は、大人（≒親）が子どもと一緒に過ごすことや子どもを世話することによって生まれる。この点に関していえば、フィリピンの親たちの間には、高い教育期待を子どもにかけ一方で、子どもの宿題を手伝ったり、子どもの勉強時間を管理・監督したり、学習や入試に関する情報を集めたりといったような実質的な教育的関与を、ほとんど見せなかった。ニューカマーの家庭では、親による子どもたちの学習への支援が困難になっていることが他の集団を扱った研究でも強調されている¹⁰⁾。

フィリピン系ニューカマーの場合、家族がトランスナショナルに形成・再編されるといふ点が特徴的であり、そうした家族の在り方が親子関係をめぐる子どもたちの心理的葛藤や学習行動に影響を与える一つの要因として働いていることを検討する必要がある。子どもたちは、日本で同居する親兄弟のみならず、母国親族とも強い紐帯を維持し、トランスナショナルな社会空間の中で家族から「日本で勉強をがんばる」という期待を背負わされていた。親と母国親族が一体となって、高い教育期待を子どもにかけ、勤勉や従順を規範とするトランスナショナルな社会空間をつくりだしているのである。子どもは親だけではなく、母国親族からも「監視」され、学業達成を強く促されていた。その際には、フィリピンと日本の就業・教育機会がリアリティをもって比較され、子どもたちが日本での豊かな生活を享受できるのは家族のおかげであるから、勉強を頑張ることで家族に「恩返し」をする義務が強調される。

一方で、子どもたちは家族から「勉強を頑張りなさい」という強いメッセージをトランスナショナルな社会空間の中で受け取りながらも、家族から実質的な支援を受け取れないという矛盾した状況に対して焦燥感を抱き、家族に対する疎外感を深めていた。かれらは一見親に対して従順な態度を見せるが、心の中では親から押し付けられる期待や、自分の行動への指図に対して、抑圧された不満が鬱積している様子が共通してみられた。このようにトランスナショナルな家族が形成・再編される過程において、子どもたちは親密な親子関係を形成することが難しくなっている。

家族の中で形成される高い教育意識を子どもたちの学業達成に結びつけるためにも、彼

らを受け入れる日本の学校や地域社会が子どもたちの学習意欲をくみ取り、家族に対する支援体制を整えていくことが重要である。本稿は少数の事例からフィリピン系のトランスナショナルな家族の在り方についての予備的考察を行ったが、今後は事例数を増やして、他のニューカマー集団との比較の中で、フィリピン系家族の特徴を考察するとともに、フィリピン系の子どもたちの中でトランスナショナルな家族紐帯を維持している程度やそれが学習に与える影響を検討していく必要があるだろう。

〈付記〉

本研究は、平成22~24年度科学研究費補助金基盤研究（B）「国際結婚家庭に育つフィリピン系・タイ系ニューカマーの学校適応に関する実証研究」（課題番号22330238 研究代表者：角替弘規）の成果の一部である。

《注》

- 1) イシ（2007）は、日系ブラジル人の生活がトランスナショナルな社会空間に埋め込まれていることを、恒常的な母国送金や、日本の祝日とブラジルの祝日の両方を意識したエスニックビジネスの展開を例に示している。
- 2) たとえば、途上国の女性は高賃金労働を求めて先進国に移住するが、その際は母国親族のもとに子どもを預ける場合が多い（Parreñas 2005）。経済的に豊かな家族の場合、子どもによりよい教育環境を与えるために、子どもだけ、もしくは母子だけを先進国に居住させる戦略もみられる（Zhou 1998；Huang and Yeoh 2005）。
- 3) エンターテイナーとは、バーのダンサー、歌手、ホステスとして働くフィリピン人女性の呼称である。「興行」で来日する女性は、労働基準法において「労働」とは公的に承認されないため、人権保障が国家によって看過されやすく、受け入れ当初から暴力団がらみの人身売買や強制売春を強要される場合も多かった。この問題を受けて、1996年によく興行ビザの規制強化が実現した（伊藤 2005）。
- 4) この他、本稿ではとりあげないが、家事労働者として来日し、その後日本人男性と結婚して永住資格を得ているフィリピン人女性もみられる。
- 5) 永田（2007）、p.126。
- 6) 11人すべての子どもたちは、トランスナショナルな紐帯を維持していたが、その強度には違いがみられた。世代、子どもの年齢、来日経緯、家族構成といった条件によって、トランスナショナルな紐帯を維持する程度がどのように異なるのかを検討することは今後の課題である。
- 7) 子どもたちに関しては日本語の日常会話力は身に付いているため、すべて日本語でインタビューを行った。母親については1名は日本語会話力に問題を感じていなかったため日本語で実施したが、ほか2名に関しては日本語・タガログ語・英語を織り交ぜたインタビューになった。子どもが同席したため、タガログ語を話した際には子どもを介して日本語に訳してもらった。なお、子どもたちの名前は全て仮名である。
- 8) 定松（2002）は、国際結婚したフィリピン人女性が母国送金を続ける背景には、フィリピン社会には、家族から恩義を受けて育っているため恩返しをしなくてはいけないという義務感が強く根づいているためと考察する。
- 9) 神奈川県大和市に住むフィリピン人女性の調査を行った角替・家上・清水（2011）も、母親たちが子どもたちの将来に関して学歴の効用を非常に重視していることを明らかにしている。
- 10) 宮島（2002）は、親に経済的・時間的ゆとりがないことや、日本語力や学校知識のような文化資本

が不足しているといった構造的問題によって、ニューカマーの親が子どもの勉強を世話することが難しくなっていることを述べている。

《文献》

- Coleman, J., 1988, "Social Capital in the Creation of Human Capital," *American Journal of Sociology* 94: 95-120.
- Dreby, J., 2009, "Negotiating Work and Parenting over the Life Course: Mexican Family Dynamics in a Binational Context," Nancy Foner, *Across Generation: Immigrant Families in America*, New York: New York University Press, 190-218.
- Espiritu, Y.L., 2003, *Home Bound: Filipino American Lives Across Cultures, Communities, and Countries*. Berkeley: University of California Press.
- Foner, N., 2009, "Introduction: Intergenerational Relations in Immigrant Families," Nancy Foner, *Across Generations: Immigrant Families in America*, New York: New York University Press, 1-20.
- イシ アンジェロ, 2007, 「在日になったブラジル人のトランスナショナルな模索」『現代思想 6』 35:106-115.
- 伊藤孝り, 2005, 「脱領域化するシティズンシップとジェンダー再編—滞日フィリピン人女性の状況から」『2001～2003年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(c)(1)研究成果報告書』 109-126.
- 鍛冶到, 2007, 「中国出身生徒の進路規定要因—大阪の中国帰国生徒を中心に」『教育社会学研究』 80:331-349.
- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人, 2005, 『顔の见えない定住化』 名古屋大学出版会.
- 小井土彰宏, 2005, 「グローバル化と越境的社会空間の編成—移民研究におけるトランスナショナル視角の諸問題」『社会学評論』 56(2):381-399.
- Levitt, P., 2001, *The Transnational Villagers*, Berkeley: University of California.
- Levitt, P. and N. G. Schiller, 2004, "Conceptualizing Simultaneity: A Transnational Social Field Perspectives on Society," *International Migration Review* 38:595-629.
- Menjívar, C. and L. Abrego, 2009, "Parents and Children across Borders: Legal Instability and Intergenerational Relations in Guatemalan and Salvadorian Families," Nancy Foner, *Across Generation: Immigrant Families in America*, New York: New York University Press, 160-189.
- 宮島喬, 2002, 「就学とその挫折における文化資本と動機づけの問題」宮島喬・加納弘勝『国際社会 2 変容する日本社会と文化』 東京大学出版会, 119-144.
- 永田貴聖, 2007, 「フィリピン人は境界線を越える—トランスナショナルな実践と国家権力の狭間で」『現代思想』 35(7): 116-130.
- 小ヶ谷千穂, 2005, 「滞日フィリピン女性の社会活動の多層性—日本における「移民／移動の女性化」のコンテクストからの一考察」『2001～2003年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(c)(1)研究成果報告書』 29-52.
- 太田晴雄, 2000, 『ニューカマーの子どもと日本の学校』 国際書院.
- Parreñas, R. S., 2005. *Children of Global Migration: Transnational Families and Gendered Woes*. Stanford: Stanford University Press.
- Portes, A., L. E. Guarnizo and P. Landolt., 1999, "The Study of Transnationalism: Pitfalls and Promise of an Emergent Research Field," *Ethnic and Racial Studies* 22:217-237.
- Portes, A. and R. G. Rumbaut, 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, Berkeley: University of California Press.
- 定松文, 2002, 「国際結婚にみる家族の問題—フィリピン女性と日本人男性の結婚・離婚をめぐる」宮島喬・加納弘勝『国際社会 2 変容する日本社会と文化』 東京大学出版会, 41-68.

- 佐久間孝正, 2006, 『外国人の子どもの不就学—異文化に開かれた教育とは』 勁草書房.
- 志水宏吉・清水睦美, 2001, 『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』 明石書店.
- 志水宏吉, 2002, 「学校世界の多文化化—日本の学校はどう変わるか」 宮島喬・加納弘勝『国際社会 2 変容する日本社会と文化』 東京大学出版会, 69-92.
- Smith, R. C., 2006, *Mexican New York: Transnational Lives of New Immigrants*, Berkeley: University of California Press.
- 徳永智子, 2008, 「「フィリピン系ニューカマー」生徒の進路意識と将来展望—「重要な他者」と「来日経緯」に着目して」『異文化間教育』 28:87-99.
- 坪谷美欧子, 2005, 「地域で学習をサポートする: ボランティアネットワークが果たす役割」 宮島喬・太田晴雄編『外国人の子どもと日本の教育』 東京大学出版会, 193-216.
- 恒吉僚子, 1996, 「多文化共存時代の日本の学校」 堀尾輝久ほか編『講座学校 6 学校文化という磁場』 柏書房, 215-240.
- 角替弘規・家上幸子・清水睦美, 2011, 「フィリピン系ニューカマーの教育意識に関する一考察—大和市の国際結婚家庭の事例を中心に」『桐蔭論叢』 24:89-97.
- Wolf, D. L., 2002, "There's No Place Like 'Home': Emotional Transnationalism and the Struggles of Second-Generation Filipinos," P. Levitt and M. C. Waters, *The Changing Face of Home*, New York: Russel Sage Foundation, 255-294.
- Zhou, M., 1998, " 'Parachute Kids' in Southern California: The Educational Experiences of Chinese Children in Transnational Families," *Educational Policy* 12:682-704.